

---

# 二人きりのX'mas Party

サラマンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人きりのX・mas Party

### 【Nコード】

N6999P

### 【作者名】

サラマンド

### 【あらすじ】

相手はロックオン、ニール・デイランディです。内容はファーストシーズンで武力介入をしていた頃で、クリスマスということではロインがニールの為に料理を作る話です。

**(前書き)**

これもサイトから引っ張りだしたものです。

なお、普段の内容とは違い、女の子向けな内容にしていますので注意してください。

季節は冬

今日はクリスマスイブ

さあ戦士たちに

暖かい癒しの聖夜を

二人きりのX・m a s P a r t y

今日はクリスマスイブ。

世界が気を効かせてくれたのか、今日はミッションはない。

他のマイスターもまたそれぞれが別の場所でイブを過ごす。

本来なら祖国のアイランドへ戻ろうかと思ったが、生憎クタクタでとても動こうという気になれない。

いるのは俺だけだ。

さて、どうしたものか…。

せめて、ミュキがいねば…。

今日はクリスマススイブで、私はニールと共に過ごそうと計画を立てている。

必要な食材はもう既に揃っている。

勿論、私の好きな人の好物のジャガイモを使った料理は考えてある。

ただ生憎、アイルランドの料理は分からないのでポテトグラタンにした。

飾りは蝋燭とかその程度である。

でも、ケーキに自作の小さなリースを乗せてそれらしくはしようと思う。

あとは…

パーティーが始まってからのお楽しみ。

俺はあれから結局寝転んだまま過ごしてしまった。

いつもだったら気にしないが、今日はクリスマススイブだ。

ミユキにプレゼントも何も用意していないことに気が付いた俺は慌てて外に出るが、既に夜になっていた。

「やっちまっ たなあ…。」

自分の不甲斐なさに溜め息が出て呆れ果てる。

そうして落胆していたら明かりが向こうから見えた。

「何だ？」

さっきまで気付かなかったが、いい匂いがする。

気になって行ってみると、そこには

「おお!？」

一つのテーブルの上に様々な料理が並んでいて、中央にケーキが置いてあった。

ケーキはブッシュ・ド・ノエル（丸太のような形でロールケーキにクリームをデコレーションしたケーキ）だ。

「あ、ニール、起きたんだね。」

そして、俺から見て左側にミニスカサンの格好をしたミュキが座っていた。

「これ、全部、お前がやったのか!？」

「そうだよ。」

彼女は満面の笑みで答える。

申し訳ない気持ちと同時に有り難くて愛しい気持ちが沸き上がってくる。

「一人でやらせちまって悪かったな。」

「ううん、いつもニールは頑張っているもの。あれだけ休むぐらいは罰は当たらないわ。」

本当に俺に勿体無いぐらいで、でも本当にこいつが彼女で良かったと思う。

だがここで、プレゼントも用意してないことを思いだし、額を覆う。

「…ミユキ、実はプレゼントを用意してねえんだ。」

「そっなの?…なら、私の言うことを一つ聞いてくれる?」

…まあこの場合はいいだろう。俺はその条件を飲むことにした。

「いいぜ、何をすればいい?それとも何か買っしてほしいとかか?」

俺は用意された椅子に座りながら言う。

だが、聞かれた当の本人は黙っている。というより何か呟いてる。

「…たしと…てほしいの。」

「何だって?」

俯いているため、表情が分からなかったがどうも恥ずかしかつてるようだ。

「だから、今日は私と一緒に寝てほしいの!」

「うおっ!?!」

思っていた以上に大声で言うため、耳に強く響いてしまった。

「だって、私だってニールに甘えたいもの…。」

「…それでいいのか?」

「うん…。」

多分、ミュキは不安なのかもしれない。

俺もミュキもガンダムマイスターで二人きりになることもない。

なにより任務中のミュキは気を張っているからか、ピリピリしていることが多い。

なら…

「分かった。それぐらいならお安い御用だ。…ただし、襲われても

知らないからな。」

俺が注意すると案の定、ミユキの顔が真っ赤になる。

「と、とにかく、料理が冷めちゃうからさっさと食べよう！」

ミユキは用意していたシャンパンをグラスに並々と注いだ。ついでに俺のもやっってもらった。

「ははっ、そうだな。なら、ミユキ。」

「うん。」

互いにシャンパンの入ったグラスを持って前に掲げる。

M e r r y X · m a s

今宵は

二人きりの

二人だけの

X · m a s  
P a r t y

翌日

結局、食事の後に一緒に寝るはずが美味しく頂かれてしまった私。

お蔭で腰が笑っていて上手く立てない。

「うう、ニールの馬鹿…。…ひゃうー！」

もう、ニールったら…。赤ちゃん出来たらどうするつもりなの？

「あ、ミユキ、ただいま…。…ってどうしたの？」

「ア、アレルヤ…立てないの。あ、それとケーキ作ったから後で食べてね。」

「……うん、分かったよ。刹那とティエリアにも伝えるよ。…レルヤ、僕は憂鬱だよ…嫉妬のせいだ。」

それを聞いたアレルヤの雰囲気冷えきったように見えたのは気のせい…じゃなかった。

アレルヤが立ち去った後にニールの悲鳴が聞こえたから…。

(後書き)

この小説を書いている頃は、サイト自体のコンセプトとして「男女関係なく見れる」というのがありました。

女の子が管理人をしているサイトを巡ってよく小説を見たりもしました。

で見てて解ったのが、

「恋愛ものは女の子の方が描写にしても使う言葉にしても表現が上手い子が多い」

ということですよ。

ライル「で、本編はどうしたんだよ。」

まだ…です。

ライル「派手に踊れ！」

ババババンー！

ライル「アンスタンヴァルスー！」

ほぐわあああああああー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6999p/>

---

二人きりのX'mas Party

2010年12月31日02時06分発行